



新たな「京都市動物園構想」（最終案）



いのちをつなぎ、いのちが輝く動物園となるために

【本冊】



新たな「京都市動物園構想」目次

1 京都市動物園の現状	
共汗でつくる新「京都市動物園構想」（現構想）策定以降の成果	1
2 京都市動物園の役割と更なる発展のための課題	
(1) 動物園の普遍的な役割と京都市動物園の役割	4
(2) 京都市動物園の更なる発展のための課題	5
3 京都市動物園が目指す方向性と取組	
(1) 京都市動物園理念	6
(2) 行動指針	6
(3) 5つの柱と27の施策	7
柱1 生物多様性の保全に力強く貢献し、日本をリードする動物園	8
柱2 野生動物の行動や生態、福祉を研究する世界水準の動物園	14
柱3 文化教育施設として日本国内のオンリーワンを目指す動物園	18
柱4 多くの人が集い、多くの学びを広げる動物園	28
柱5 「近くて楽しい動物園」の更なる発展	30
(4) 5つの柱と27の施策の戦略的な推進	37
4 京都市動物園コレクションプラン	38

※ 新たな「京都市動物園構想」（案）からの修正箇所を黄色塗りで示しています。





1

京都市動物園の現状



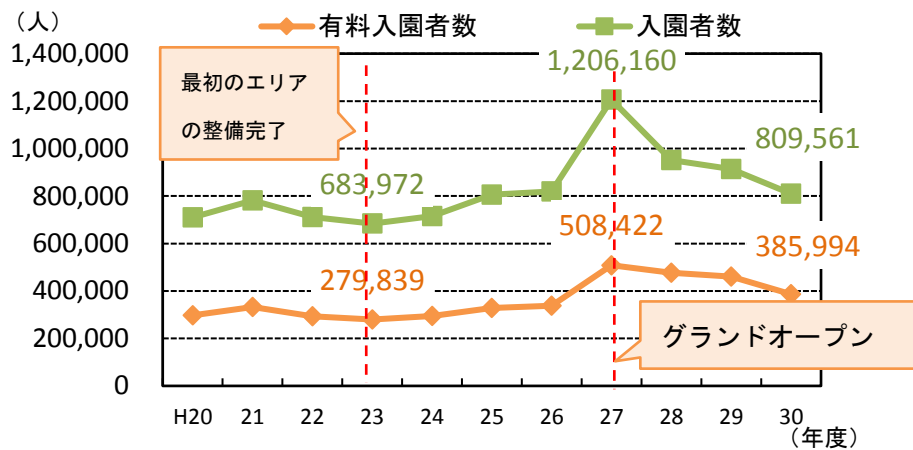
共汗でつくる新「京都市動物園構想」（現構想）策定以降の成果

現構想策定以降の成果－１：利用者

○入園者数

- ・最初のエリアの整備が完了した平成２３年度（２０１１）から右肩上がりとなり、グランドオープンした平成２７年度（２０１５）には、昭和５４年（１９７９）以来、３６年ぶりに１２０万人を越え、前年度比は５０．３％増となった。平成２８年度（２０１６）以降はグランドオープン効果が薄れ減少傾向にあるものの整備前よりは高い水準を維持している。

■入園者数の推移

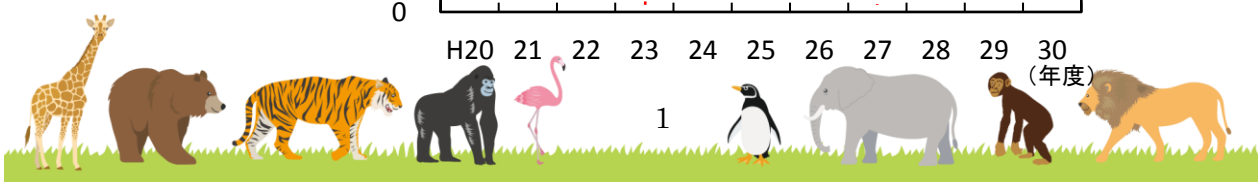
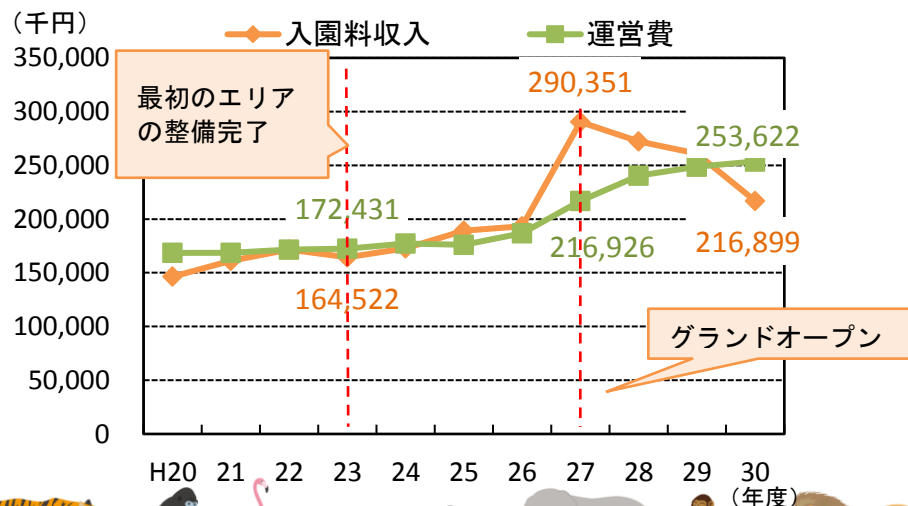


現構想策定以降の成果－２：収益

○入園料収入

- ・最初のエリアの整備が完了した平成２３年度（２０１１）から右肩上がりとなり、グランドオープンした平成２７年度（２０１５）には前年度比が５０．１％の大幅増となった。平成２８年度（２０１６）以降はグランドオープン効果が薄れ減少傾向にあるものの整備前よりは高い水準を維持している。

■入園料収入及び運営費の推移



現構想策定以降の成果－３：教育効果

○中学生以下の団体入園者数の増加

- ・平成２６年度（２０１４）に対してグランドオープンした平成２７年度（２０１５）は保育園、幼稚園、小学校、中学校全てにおいて１５％以上増加。

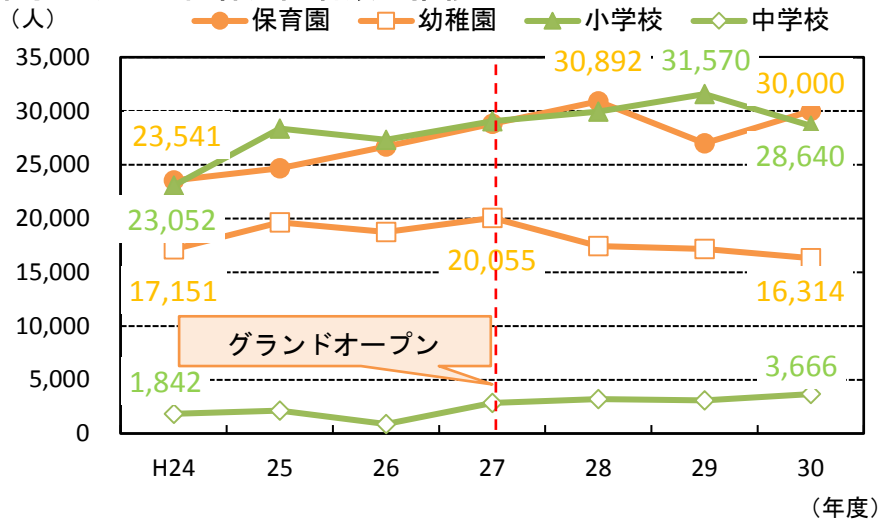
○サマースクールをはじめとする各種教育プログラムの充実

- ・小学校から大学生までを対象に、サマースクール、実習生の受入れ等、様々な教育プログラムを実施。

○教育機関や各種団体向けの講演回数も大幅に増加

- ・「生き物・学び・研究センター」を設置した平成２５年度（２０１３）以降大幅に増加、現在では年間２００件近くの講演を実施。

■中学生以下の団体入園者数の推移



■講演実績

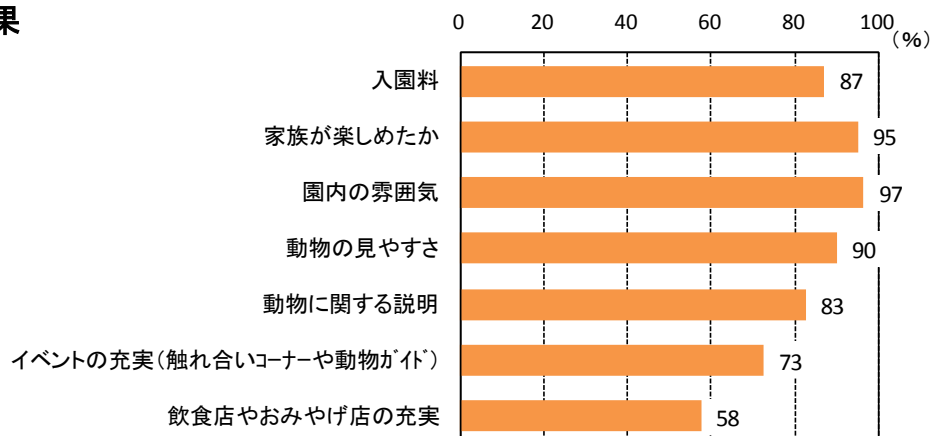
年度	回数
H24	71
25	119
26	131
27	184
28	196
29	188
30	177

現構想策定以降の成果－４：来園者の高い満足度

○来園者からの高い評価

- ・来園者アンケート（平成３０年度（２０１８）実施）から見える高い満足度としては、「園内の雰囲気」、「家族で楽しめた」、「動物の見やすさ」、「入園料」等で高い評価をいただいた。

■来園者アンケートの結果



現構想策定以降の成果－５：共汗する参加者の広がり

○ボランティア

- ・京都市動物園ボランティアーズは昭和５６年（１９８１）に設立。毎年約５０名の方々が「おとぎの国」で動物との触れ合いをお手伝い。

○「京都市動物園サポーター制度」(京都市動物園 Zoo～っとサポーター)

- ・「エサ代サポーター」, 「商品提携サポーター」, 「看板広告サポーター」, 「提案型サポーター」として, 市民や事業者からの支援が増加。

○本園の取組への参画

- ・外部団体や機関との連携, 各種イベントやプロジェクトへの参加を通じて, 市民をはじめ NPO 団体や学識者等の本園の取組への参加者が増加。

■エサ代サポーターの実績

例: 10万円以上の御寄付(特典として動物舎へプレートを掲示している)

年度	H26	H27	H28	H29	H30
プレート掲示件数	7	17	21	25	35

※平成26年度(2014)は6月以降の実績。

現構想策定以降の成果－６：研究機関としての役割・機能強化

○京都大学との連携(平成20年(2008)4月)

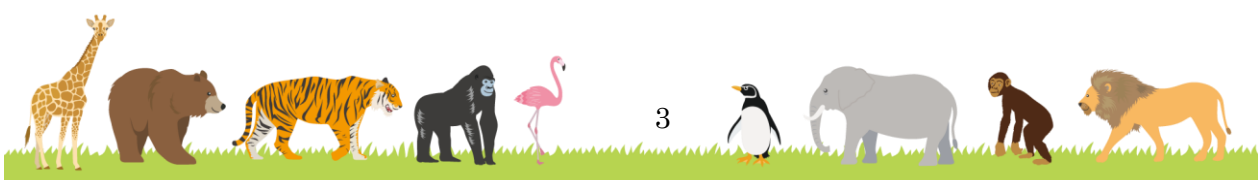
- ・京都大学との間で「野生動物保全に関する教育及び研究の連携協定」を締結。京都大学野生動物研究センターの教員が常駐(大学教員が動物園に常駐するのは国内初)。

○生き物・学び・研究センターの設置(平成25年(2013)4月)

- ・本園における学術研究と環境教育をより一層推進するために設置。「生き物について学ぶ」, 「生き物から学ぶ」, 「学びについて学ぶ」, 「学びから学ぶ」の４つの使命を掲げる。

○「学術研究機関」として文部科学省から指定(平成30年(2018)1月31日)

- ・文部科学大臣から研究機関として指定を受け, 科学研究費補助金による助成を受けて研究を推進することが可能となった。





2

京都市動物園の役割と更なる発展のための課題



（１）動物園の普遍的な役割と京都市動物園の役割

本園も加盟している（公社）日本動物園水族館協会（JAZA）[※]は、加盟園館が「種の保存」、「教育・環境教育」、「調査・研究」、「レクリエーション」の４つの役割を果たすことを目標にしています。

京都市動物園では、本園の特徴である「研究」を特に重要な役割として捉え、その成果を「種の保存・環境保全」と「教育」に反映させて、動物の飼育と繁殖、情報発信等に取り組むとともに、「学び」の中にこそ「楽しみ」があるという考えに立ち、楽しみながら学べる「レクリエーション」を市民に提供していきます。

1 種の保存・ 環境保全の 拠点の役割

ゾウの繁殖プロジェクト、国内で唯一の三世代累代繁殖に成功しているニシゴリラの繁殖、グレビーシマウマの繁殖等、国際的な取組とともに、国内での絶滅が危惧されるツシマヤマネコの保護増殖事業にも取り組み、国内でも有数の種の保存拠点になっています。今後も、様々な種の繁殖に取り組むとともに、京都議定書誕生の地として、野生動物が暮らす環境保全についても発信していきます。

2 研究機関の 役割

平成20年（2008）に京都大学と協定締結を行い、国内で初めて大学教員が常駐する動物園として、各種調査研究を実施してきました。平成25年（2013）には研究と教育を専門で担う「生き物・学び・研究センター」を国内動物園では初めて設置し、平成30年（2018）に文部科学省から「学術研究機関」として指定を受けました。今後も、全国でも先進的な施設として、様々な研究機関と連携し、種の保存や動物福祉に関する研究等を推進していきます。

3 教育機関の 役割

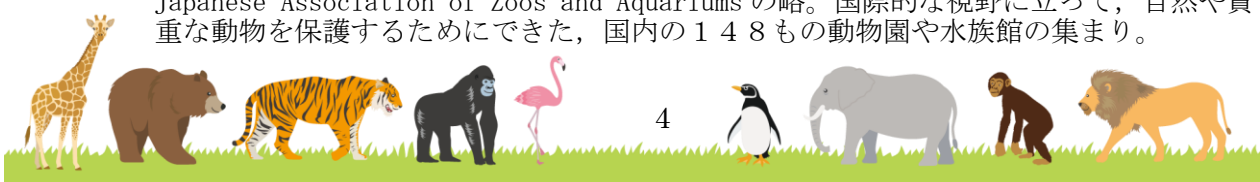
年間200件近くの講演や博物館・獣医学の実習・体験学習を、市内外の教育機関を中心にお年寄りも含めた全世代から受け入れています。また、園内での動物ガイドやふれあいイベントを通して、生物多様性や命の大切さについて多くの方々に知っていただく機会を設けています。今後も、研究機関としての研究成果を来園者に分かりやすく伝えることや、来園者自らが学ぶ環境の整備に積極的に取り組み、教育機関としての役割も強化していきます。

4 レクリエー ション施設 の役割

「学び」の中にこそ「楽しみ」があるという考え方に立ち、生物多様性の重要性や環境教育・研究成果を市民に分かりやすく伝えることを通じて、「学ぶ楽しみ」を提供します。さらに、国の「重要文化的景観」に指定された「京都岡崎の文化的景観」を構成する施設として、そして市内でも有数の文化芸術面の「学び」を提供するエリアにある施設として、京都市京セラ美術館、ロームシアター京都、琵琶湖疏水記念館等とともに多くの来園者の方々に楽しんでもいただける動物園づくりを行います。

注 （公社）日本動物園水族館協会（JAZA）：

Japanese Association of Zoos and Aquariums の略。国際的な視野に立って、自然や貴重な動物を保護するためにできた、国内の148もの動物園や水族館の集まり。



(2) 京都市動物園の更なる発展のための課題

本園では更なる発展のために、以下の5つの課題に取り組んでいきます。

「いのちをつなぎ、いのちが輝く動物園」になるために

- ・絶滅危惧種（アジアゾウ、ニシゴリラ、グレビーシマウマ、ツシマヤマネコ、イチモンジタナゴ等）の域外保全^{注1}から域内保全^{注2}への展開を推進する必要があります。
- ・絶滅危惧種の繁殖の推進のために、繁殖施設整備について検討の必要があります。
- ・動物福祉に配慮した飼育環境の充実、とりわけ、動物福祉の観点から課題のあるサルワールド（類人猿舎及びサル島）の再整備が必要です。
- ・国際的な枠組みの中で中長期的な動物種の飼育展示計画（コレクションプラン^{注3}）を検討し、実現に向けた取組が必要です（Species 360^{注4}への加入等）。

「研究する動物園」として発展するために

- ・京都大学をはじめとする研究機関と連携した研究により、動物の知性や生態の理解を進め、動物の飼育・繁殖・福祉に繋げる必要があります。
- ・本園の研究成果を市民に分かりやすく発信し、動物園ならではの研究について学んでもらうことが必要です。
- ・動物の社会的行動や特性から人間社会について学ぶという観点を取り入れた研究を進める必要があります。

「楽しく学べる動物園」となるために

- ・SDGsの取組等、身近な環境から地球レベルの環境問題に向き合う機会となる環境教育施設としての機能・コンテンツの充実が必要です。
- ・全ての世代に対応した生涯学習施設としての機能・コンテンツの充実が必要です。

「多くの人が集う動物園」となるために

- ・国際文化観光都市である京都に立地する動物園として、観光客の多様化、特にインバウンドに対応した施設、展示の充実・配慮が必要です。

「近くて楽しい動物園」として発展するために

- ・現代的な展示手法や動物福祉の考え方を積極的に取り入れた飼育、展示施設の充実を図る必要があります。
- ・施設の長寿命化（計画修繕）の実施や中長期的な目線で施設整備を検討することが必要です。
- ・様々な年代の方にお越しいただけるように、ユニバーサルデザイン化を進めることが必要です。

注1 域外保全：絶滅危惧種を守るため、動物園等安全な施設に生き物を保護して、それらを増やすことにより絶滅を回避する方法。

注2 域内保全：絶滅危惧種を守るため、本来の生息地で自然環境を維持しつつ、その個体群や群落の保全を図ること。

注3 コレクションプラン：生物の保存、繁殖に取り組むために生物を選定、分類し、管理していく計画のことで、展示する各個体の繁殖・飼育管理の方針について検討するもの（37ページ参照）。

注4 Species 360：世界水準の動物管理情報を提供する世界最大の非営利団体。システムを通じて国内外における繁殖可能な飼育下動物の情報を得ることができる。





3

京都市動物園が目指す方向性と取組



京都市の最上位の都市理念である「世界文化自由都市宣言」の下、現代の動物園としての役割を果たすため、「京都市動物園理念」を以下のとおり定めます。

(1) 京都市動物園理念

動物園の役割は時代とともに変化してきました。地球規模での環境破壊が進むなか、いま、現代における新たな動物園像が求められています。人間もまた地球に生きる動物の一員であることを踏まえ、京都市動物園は、ヒトを含む全ての動物のいのちと暮らしに敬意を持って向き合い、市民の皆様とともに動物園文化の成長と発展に寄与することを目指します。

(2) 行動指針

①種の保存

絶滅のおそれのある動物種の繁殖に取り組み、希少種のいのちをつなぎ、種の保存に寄与します。

アジアゾウやニシゴリラ、グレビーシマウマ等が国内の動物園からいなくならないように、また、日本の絶滅危惧種であるツシマヤマネコや京都の絶滅寸前種であるイチモンジタナゴを支えるために、希少種の繁殖に取り組みます。

②動物福祉

動物の福祉に配慮し、いのちを輝かせる飼育・展示を行います。

群れを作る動物は群れで飼育し、樹上を利用するものは利用できるように環境を整え、動物が幸せに暮らすことができるように配慮します。

③研究

野生動物の行動や生態、動物福祉等の研究を推進し、生物多様性の保全に寄与します。

動物園では国内初となる、科学研究費補助金を申請できる「学術研究機関」として文部科学省から指定を受けました。これらの外部資金を活用する等研究を積極的に推進します。

④楽しく学ぶ

種の保存の取組や研究の成果を活かし、幅広い年齢層を対象に環境教育を実践し、楽しい学びの場を提供します。

市民一人ひとりが「生物多様性」や「環境保全」を自分ごととして捉え参画することを支援し、環境意識が向上する場となることを目指します。

⑤安心安全

安心で安全な動物園であり続けます。

来園者や職員、そして、飼育動物の安全を守るために、定期的な点検や検証、研修を通じて、安全への意識を低下させることのないように、万全の対策を講じてまいります。

⑥発信

様々な市民・団体との共汗により、人と動物に係る文化を発信します。

動物園だよりなどの刊行物やSNS（Twitter, Instagram, Facebook）等、時代に応じた広報媒体を活用し本園の動物たちの魅力や取組を発信します。



(3) 5つの柱と27の施策（◇は新構想から新たに追加した取組）

柱1 生物多様性の保全に力強く貢献し、日本をリードする動物園

- 施策 1 持続可能な飼育展示・繁殖の推進
- 施策 2 国際的な希少種の域外保全の推進
- 施策 3 国内希少種の域外・域内保全の推進

柱2 野生動物の行動や生態、福祉を研究する世界水準の動物園

- 施策 4 希少種の保全や動物福祉の研究の推進(◇)
- 施策 5 動物の子育て、競合、協調から人間・社会を学ぶ研究(人間教育)の推進(◇)
- 施策 6 遺伝子解析を駆使した繁殖・保全の推進(◇)
- 施策 7 学術機関との連携による研究・教育普及活動の推進(◇)
- 施策 8 動物福祉の研究の飼育環境・教育普及事業への活用(◇)

柱3 文化教育施設として日本国内のオンリーワンを目指す動物園

- 施策 9 動物園における環境教育の充実(◇)
- 施策 10 「きょうと☆いのちかがやく博物館」事業(4園館連携)の推進(◇)
- 施策 11 京都府立植物園との政策と事業の融合・連携の推進(◇)
- 施策 12 国内外の実習生の受入れによる教育の場の形成(◇)
- 施策 13 京都市立芸術大学との連携等、文化を発信する場としての機能向上(◇)
- 施策 14 世界に向けた研究成果や動物園の取組の発信(◇)
- 施策 15 学校教育の素材としての動物園の活用の推進

柱4 多くの人が集い、多くの学びを広げる動物園

- 施策 16 岡崎地域活性化のための連携
- 施策 17 外国人観光客の誘致(多言語化等)(◇)
- 施策 18 「環境都市・京都」の発信による教育旅行の誘致(◇)
- 施策 19 効果的な広報活動の展開

柱5 「近くて楽しい動物園」の更なる発展

- 施策 20 展示の充実及び「エコ・Zoo」の推進
- 施策 21 ユニバーサルデザインの推進
- 施策 22 顧客満足度(CS)の高いサービスの提供
- 施策 23 市民ボランティアとの協働(◇)
- 施策 24 共汗に基づく市民及び企業の参加促進
- 施策 25 ハード整備の推進(◇)
- 施策 26 動物舎の計画的な維持・管理充実(◇)
- 施策 27 運営体制の充実及び更なる安全対策の実施(◇)



構想の柱 1

生物多様性の保全に力強く貢献し、日本をリードする動物園

施策 1 持続可能な飼育展示・繁殖の推進

環境エンリッチメント[※]等、動物福祉に配慮した取組のより一層の強化及び飼育動物の心理的な幸福を目指し、コレクションプランに基づいた飼育・繁殖に取り組む。

具体的なアクション

①コレクションプランに基づいた、**国内外の動物園との連携による**持続可能な飼育展示・繁殖の推進。

②動物福祉に配慮し、環境エンリッチメントを通じて飼育動物の幸福を再現。

③環境省から「認定希少種保全動植物園等」の認定を受け、希少種の移動手続が緩和されることによる繁殖活動の推進。



(飼育動物の例：キリン)



(飼育動物の例：チンパンジー)

注 環境エンリッチメント

動物福祉の立場から、飼育動物が心身ともに健康に暮らせるように飼育環境を豊かにする工夫や試みのこと。

施策 2 国際的な希少種の域外保全の推進

ラオスとの国際協力によるゾウの繁殖プロジェクトを推進するとともに、アジアゾウの繁殖拠点を目指す。また、ニシゴリラやグレビーシマウマ等の国際希少種は国際的な協力も得て飼育下繁殖を推進し国内の繁殖拠点として日本をリードする。



(事例：グレビーシマウマ)

具体的なアクション

①ゾウの繁殖プロジェクトを推進し、域外保全に貢献。

②ニシゴリラの飼育繁殖に関する実績の発信による国際的な信頼の獲得。

③グレビーシマウマの繁殖拠点としての施設の充実及び国内繁殖計画の推進。



現在の取組

①アジアゾウ、ニシゴリラ、グレビーシマウマ、チンパンジー、マンドリル、ジャガー、ヤブイヌ、フンボルトペンギンの繁殖。

- ・生息地の環境破壊と密猟などによりその数が減少し絶滅が危惧されている、アジアゾウ、ニシゴリラ、グレビーシマウマ等の繁殖・保護活動に取り組んでいる。

②ゾウの繁殖プロジェクト

- ・「京都市動物園開園110周年」（平成25年（2013））と「日ラオス外交関係樹立60周年」（平成27年（2015））を契機に、両国友好のシンボルとして平成26年度（2014）から継続して行われている。

- （1）ラオスからアジアゾウ4頭（オス1頭、メス3頭）の寄贈を受け、本園で飼育し、2国が協力して繁殖に取り組む。
- （2）ゾウの飼育・健康管理・繁殖技術の向上を図るため、身体や行動の成長発達、生理指標のモニタリング等、繁殖に関連する基礎データを収集する。
- （3）両国のプロジェクト関係者が互いに訪問し、プロジェクトの進捗を確認するとともに、両国においてプロジェクトの普及啓発を行う。

H26年度	ラオスから4頭の子ゾウが動物園に到着する。 講演会「子ゾウのふる里～ラオスと出会う～」等
H27年度	子ゾウのトレーニングを進める。 ラオスとの人材交流事業を開始する。
H28年度	性ホルモン検査や給餌内容の栄養分析を行う。 サイニャブリー県野生ゾウ保護区を視察する。
H29年度	4頭のうち最年長個体が性成熟に入る。 講演会「これであなたもゾウ博士」等
H30年度	47歳の美都と4頭の子ゾウが同居を始める。 動物園で「ラオス展」等



（ラオスからの訪問団の様子）



（子ゾウたちの様子）



施策 3 国内希少種の域外・域内保全の推進

国の天然記念物で国内希少野生動植物種^{注1}のツシマヤマネコや京都府の絶滅寸前種であるイチモンジタナゴについて、飼育下繁殖を推進し、国内及び地域の野生動物の保全につながる取組を強化する。



(上 事例：イチモンジタナゴ)

(左 事例：ツシマヤマネコ)

具体的なアクション

- ①環境省が中心になって進めているツシマヤマネコの保護増殖事業への参画（繁殖施設における飼育及び他園との連携による繁殖の取組）。
- ②市民への普及啓発イベントである「やまねこ博覧会」の開催やヤマネコ米^{注2}の販売促進等によるツシマヤマネコの保全活動に対する市民理解の促進。
- ③京都府下で唯一繁殖が確認されていた平安神宮と協力し、イチモンジタナゴの繁殖及び野生復帰^{注3}に向けた取組の推進。
- ④「守れ！イチモンジタナゴプロジェクト」の継続実施によるイチモンジタナゴの保全活動に対する市民参加の促進。

注1 国内希少野生動植物種

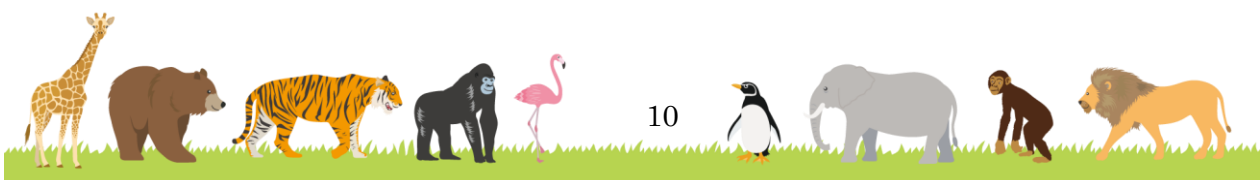
平成5年(1993)4月に施行された「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(種の保存法)で国内に生息・生育する希少野生生物のうち、人為の影響により生息・生育状況に支障をきたしているものの中から指定した種。

注2 ヤマネコ米

対馬の佐護(さご)区で、生き物に関心のある農家の方を中心に「佐護ヤマネコ稲作研究会」を立ち上げ、多様な生物を育む水田を復活させてヤマネコも住める里づくりを進めるために、減農薬で栽培した米。

注3 野生復帰

生息域外におかれた個体を自然の生息地(過去の生息地を含む)に戻し、定着させること。



現在の取組

①ツシマヤマネコ保護増殖事業

- ・平成24年(2012)4月に、ツシマヤマネコの保護増殖事業(環境省)の普及啓発を目的として、展示を開始。
- ・平成26年(2014)5月に環境省と(公社)日本動物園水族館協会(JAZA)の間で締結した「生物多様性保全の推進に関する基本協定」に基づき、本園と名古屋市東山動物園が飼育下繁殖の第二拠点として位置付けられる。
- ・平成29年(2017)5月、本州で初となるツシマヤマネコの繁殖(2頭)に成功している(現在、4頭飼育)。

②やまねこ博覧会

- ・絶滅の危機に瀕しているツシマヤマネコの現状や、その保全に関する取組をより深く知ってもらうために、年に1回「やまねこ博覧会」を開催。講演会やブース出展を通してツシマヤマネコの保全活動の啓発を行うとともに、集客のためにエアー遊具の設置、ツシマヤマネコの着ぐるみとの記念撮影等を実施している。



(ツシマヤマネコの展示の様子)



(やまねこ博覧会の様子)

③守れ！イチモンジタナゴプロジェクト

- ・平成28年度(2016)より、琵琶湖水系に生息しているイチモンジタナゴの飼育下繁殖及び野生への再導入を目指す。
- ・多くの市民が訪れる動物園の特性を活かし、京都の身近で豊かな自然に関する啓発展示を行い、地域の自然環境保全へ貢献するために市民と共同で保全活動を行っている(生物多様性アクション大賞2016に入賞、詳細はP13を参照)。



(「守れ！イチモンジタナゴプロジェクト」の様子)



傷付いた鳥獣が野生に戻るお手伝いをしています

野生鳥獣救護事業

- ・昭和50年度（1975）から京都府と協力して、京都市域の傷ついた野生の鳥類と哺乳類の救護活動を行っています。京都市内で救護された野生の鳥類と哺乳類について、治療を行い、回復して自然復帰ができるようになると京都府の職員によって適切な場所に放しています。
- ・平成元年（1989）10月には野生鳥獣救護センターを開所。救護動物数に対して、救護センターが手狭であったため、平成25年度（2013）に新しい救護センターを開設し、7月1日より現在の救護センターで救護事業を行っています。
- ・平成25年度（2013）から有害鳥獣が除外されたため、平成24年度（2012）には460件以上あった救護件数が、近年は100件未満に減少しています。



（治療の様子）



（野鳥の放鳥の様子）

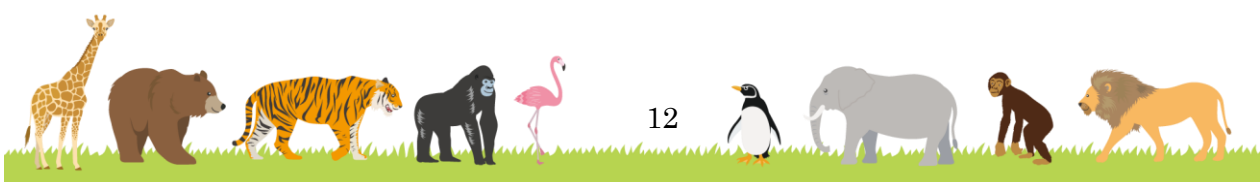
京都市動物園の取組が評価されました！

平成18年度（2006）と平成21年度（2009）に「エンリッチメント大賞」を受賞しました！

- ・本園で行っている環境エンリッチメントに関する取組がNPO法人「市民ZOOネットワーク」主催による「エンリッチメント大賞」において、平成15年度（2003）以降、一次審査を7回通過しました。そのうち平成18年度（2006）（飼育担当者部門）及び平成21年度（2009）（チンパンジー舎）には大賞を受賞しました。



（チンパンジー舎の様子）

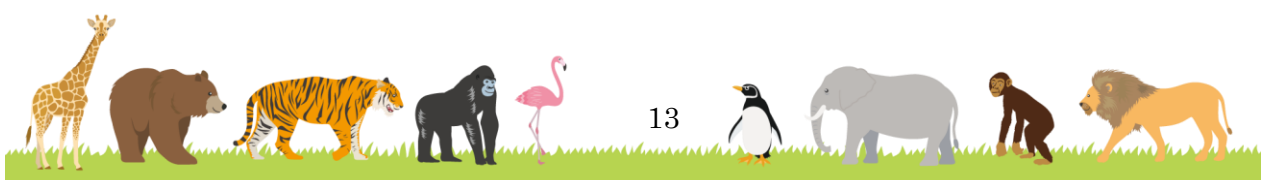


生物多様性アクション大賞2016で入賞しました！

- ・本園で実施する「守れ！イチモンジタナゴプロジェクト」が国連生物多様性の10年日本委員会（UNDB-J）主催による「生物多様性アクション大賞2016」で入賞しました。

【「守れ！イチモンジタナゴプロジェクト」の活動内容】

実施実績	平成28年度（2016）以降（継続中）
活動内容	「ろ過について学び、底面ろ過装置を作る」、「白川の生物調査」 「噴水池の整備（アオミドロ取り、ヨシの剪定、小川の掃除）、生物調査」 「外来種について学ぶ（噴水池のアメリカザリガニ駆除）」等



構想の柱 2

野生動物の行動や生態，福祉を研究する世界水準の動物園

◆ 施策 4 希少種の保全や動物福祉の研究の推進

希少動物の保全及び動物福祉の研究を更に推進し，研究成果を日本国内だけでなく世界に向けて積極的に発信する。

具体的なアクション

- ①ゾウやゴリラをはじめとした絶滅が危惧される希少動物の繁殖と保全に関する研究の推進と講演等による市民への発信。
- ②飼育管理技術向上のための動物福祉科学に関する研究の更なる推進と J A Z A 等の動物園ネットワークにおける成果の発信。
- ③科学研究費補助金等の外部資金を活用した動物園の研究活動の推進と学術論文の寄稿等，成果の公開と還元。



（事例：ニシゴリラの3世代繁殖）

◆ 施策 5 動物の子育て，競合，協調から人間・社会を学ぶ研究（人間教育）の推進

国内の動物園では唯一の取組である比較認知科学の研究は，類人猿からヒトに至る「こころの進化」を学ぶことができるものであり，その研究成果を来園者はもとより，各種メディアを通じて国内外に積極的に発信する。

具体的なアクション

- ①ヒトを含めた霊長類の「こころの進化」に関する比較認知科学的研究の推進。
- ②研究者が来園者に向けて動物の生態や行動について解説するプログラムの実施（野生動物学のすすめ，6000万年サルの旅，サルのお勉強の話）。
- ③霊長類の知性を体験できる展示。
- ④国際ゴリラワークショップ等，国際的な会合における成果の発表。



（事例：ゴリラの知性の研究）



◆ 施策 6 遺伝子解析を駆使した繁殖・保全の推進

希少動物において遺伝子解析を実施し、遺伝的多様性を把握し、集団内の遺伝的多様性が保持できる繁殖計画の立案を行う。また、野生集団の保全に有用な遺伝子解析手法を開発する。



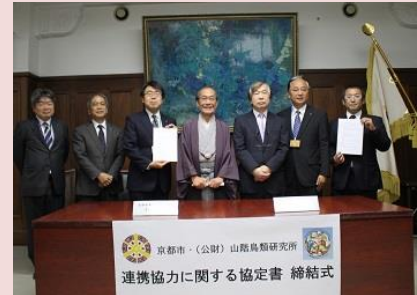
(検体資料の採取の様子)

具体的なアクション

- ① 遺伝的多様性に関する研究成果の繁殖計画や環境保全活動への活用。
- ② 性別判別や年齢推定等、種の保存に有用な遺伝子解析手法の開発・実践。

◆ 施策 7 学術機関との連携による研究・教育普及活動の推進

(公財) 山階鳥類研究所や京都大学をはじめ他の研究機関と連携し、多様な観点から研究及び研究成果の還元による教育普及活動を進める。



(事例：(公財) 山階鳥類研究所との連携協定)

具体的なアクション

- ① (公財) 山階鳥類研究所等、外部研究機関との研究協力体制の構築。
- ② 京都大学との連携に基づいた研究・教育活動の推進。
- ③ 「ゾウの繁殖プロジェクト」をはじめとする国際共同研究の推進。

現在の取組

① 生き物・学び・研究センターの設立

- ・平成20年度(2008)に京都大学と京都市の間で、「野生動物保全に関する教育及び研究の連携協定」が結ばれ、京都大学野生動物研究センターの教員が動物園に常駐するなど、本園と京都大学野生動物研究センターがその中核となって活動してきた。
- ・平成25年度(2013)に、本園における学術研究と環境教育をより一層推進するために、新たに「生き物・学び・研究センター」が設置された。
- ・平成29年度(2017)には、京都大学から新たに研究者を迎え、研究体制の充実を図り、平成30年(2018)1月、文部科学大臣から研究機関として指定を受け、科学研究費補助金による助成を受けて研究を推進することが可能となった。



②研究機関と連携した教育普及イベントの開催

- ・（公財）山階鳥類研究所との連携記念企画展及びシンポジウム
協定の締結を記念して、平成30年度（2018）には（公財）山階鳥類研究所を知っていただくためのポスター展示を行う企画展と、記念シンポジウム「鳥類系統学のいまーハヤブサはワルぶったインコなのかー」を実施した。



（記念シンポジウムの様子）

・「野生動物学のすすめ」

京都市と京都大学の「野生動物保全に関する教育及び研究の連携協定」を記念した「野生動物学のすすめ」を開催。

- 体験型学習プログラム（京都大学連携ワークショップ）。
- 野生動物や地球環境保全をテーマとした講演会等。
- 関連NPOによるブース展示、野生動物写真展等。



（ワークショップの様子）

◆ 施策 8 動物福祉の研究の飼育環境・教育普及事業への活用

動物福祉に関する研究を飼育環境の改善や教育普及事業に反映する。

具体的なアクション

- ①動物の行動や生理学的指標を用いて飼育環境や環境エンリッチメントの客観的な評価を行う。
- ②科学的な評価を基にした、環境エンリッチメント計画の策定及び実施。
- ③市民参加型の環境エンリッチメント体験イベントの実施。



（事例：チンパンジーの環境エンリッチメント体験）

現在の取組

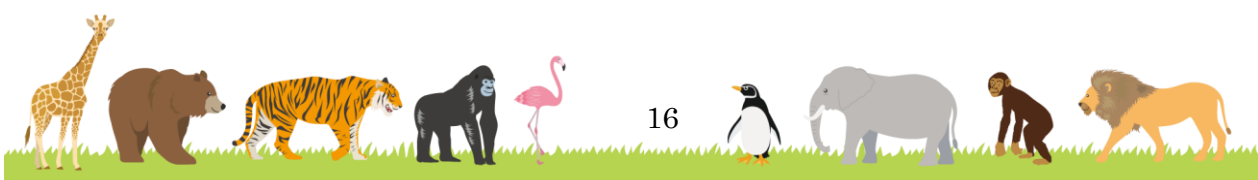
市民参加型の環境エンリッチメント体験イベント

- ・「トラのエンリッチメントにレッツトライ！」と題して、動物園でのトラに対する環境エンリッチメントの取組をブログとして紹介するほか、参加型のイベントとして来園者等と一緒に取組を行っている。

トラの
エンリッチメント
にレッツトライ！

対象：小学生以上

- ・野生のトラが狩りの時に行う行動を、本園のトラたちから引き出せるような工夫と一緒に準備。
- ・ダンボール等を使って肉を隠して、トラたちの生き生きとした行動の観察。



国内唯一の施設です！

学術研究と環境教育の拠点「生き物・学び・研究センター」

・本園では、平成20年(2008)4月、京都大学との間で「野生動物保全に関する教育及び研究の連携協定」を締結し、平成25年(2013)4月、動物園内の研究・教育を統括する組織として、「生き物・学び・研究センター」を設置しました。

【生き物・学び・研究センターの4つのミッション】

○生き物について学ぶ	野生動物の行動や生理、ゲノムに関する基礎研究を行い、その成果を通して飼育管理方法の改善や繁殖に貢献することを目指す。
○生き物から学ぶ	本来の生息地において絶滅の危機に瀕している動物たちを通して、地球環境や地球に暮らす全ての「いのち」の大切さを学べるようにする。
○学びについて学ぶ	小・中・高等学校、大学教育への貢献を目指す。また、現在、動物園の利用頻度が低い中学校以降の世代が利用する教育プログラムの開発、教育の実践を行う。
○学びから学ぶ	生きている動物を写生できる場を提供してきた動物園として、京都画壇に貢献してきた伝統と、世界をリードしてきた京都大学の霊長類をはじめとする野生動物研究から、「文理の知を超えた学び」の姿を学べる場を目指す。

【研究】

本園は、平成30年(2018)1月に文部科学大臣から「学術研究機関」としての指定を受け、科学研究費補助金の申請が可能となった。現在、生き物・学び・研究センターに所属する研究員が取得した科学研究費補助金を活用して、比較認知科学、動物福祉科学、ゲノム科学等の多様な研究を行っている。また、大学やその他の研究機関の研究者との共同研究計画を推進している。

【連携事業】

京都大学、京都精華大学、(公財)山階鳥類研究所及び嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学との間に連携協定を締結し、共同研究の企画、普及啓発事業等での協力を行っている。また、京都府立植物園、京都水族館、京都市青少年科学センターとの4者による「包括交流連携協定」を締結し、共同ワークショップ等を実施している。

【国際関連事業】

「ゾウの繁殖プロジェクト」をはじめとする海外の機関との共同研究プロジェクトを実施している。令和元年(2019)6月には京都大学との共催で「国際環境エンリッチメント会議」を開催したほか、海外から研究者を招へいし、国際セミナーやシンポジウムを開催している。

【教育・普及啓発事業】

教育プログラムを整備し、小・中・高校及び大学での学校教育課程における動物園の利用促進を図る。動物園内外における講演等を積極的に実施し、生涯学習機関としての動物園の意義を高める。



構想の柱3

文化教育施設として日本国内のオンリーワンを目指す動物園

施策 9 動物園における環境教育の充実

「京都市生物多様性プラン」に掲げる生物多様性の啓発や京都議定書で定められた地球温暖化対策の理解を深めることはもとより、SDGs（持続可能な開発目標）の課題等、動物園に求められる教育のニーズが高まっていることを踏まえ、動物園における環境教育の充実を図る。そして、**実際に生きている動物を見て深く学べるという利点を活かし**、市民一人ひとりが「生物多様性」や「環境保全」を自分ごととして捉え参画していくことを支援し、環境意識が向上する場となることを目指す。

具体的なアクション

- ①国際希少種、国内希少種の繁殖を進め、種の保存を通じた生物多様性保全への寄与。
- ②京都市環境審議会、生物多様性保全検討部会及び生物多様性庁内会議への参加による、次期「京都市生物多様性プラン」の実行と普及啓発。
- ③京都精華大学や嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学、**環境政策局地球温暖化対策推進室等**との連携による、園内の資源を活かした普及啓発事業。
- ④NPO等外部団体との共同企画による環境教育事業の展開。
- ⑤教育プログラムに基づいた、園内における環境教育の普及の促進。
- ⑥**子どもから大人まで学べる生涯学習の促進。**



（事例：SDGsの17の目標）

施策 10 「きょうと☆いのちがやく博物館」事業（4園館連携）の推進

京都市動物園、京都府立植物園、京都水族館、京都市青少年科学センターが連携する「きょうと☆いのちがやく博物館」事業により、生物多様性を**楽しく**学ぶ機会を市民に広く提供する。

具体的なアクション

- ①連携する各園館で主催する普及啓発事業の発展・充実。
- ②京都市生物多様性プランの普及啓発。
- ③4園館連携を基盤とした市内の科学系博物館との連携の推進。



（事例：京都府立植物園でのワークショップ）



現在の取組

「きょうと☆いのちかがやく博物館」事業（4園館連携）の実施

- 京都市動物園・京都府立植物園・京都水族館の3園館が、「いのちかがやく」を共通のコンセプトに掲げて連携し、次世代に向けた京都の自然環境の継承及び体験・啓発等を調和させ、地域や社会の活性化に一層貢献していくことを目的に、平成27年（2015）3月に「包括交流連携協定」を締結した。さらに、平成28年（2016）3月には、「京都市青少年科学センター」が加わり、4園館連携として発展させた。平成29年度（2017）から環境政策局環境企画部環境管理課も事業に加わっている。
- 4園館のそれぞれが担当する普及啓発イベントに連携各園館スタッフが参加するほか、連携する園館の展示への協力を開始している。



共通コンセプト	「きょうと☆いのちかがやく博物館」
事業項目	(1) かけがえのない生態系に関する事業連携 (2) 次世代への京都の自然環境の継承及び体験・啓発 (3) 幅広い情報発信と職員交流の推進

施策 11 京都府立植物園との政策と事業の融合・連携の推進

京都府立植物園との連携の一環として、政策と事業の融合・連携による取組として、新たな事業協力や共同での普及啓発活動を推進する。

具体的なアクション

- ① 共同シンポジウム等の開催を通じた生物多様性、環境保全の啓発推進。
- ② 植物園由来の木材・草本を本園展示に活用、動物の糞を原料とする肥料を植物園で活用する等、展示における連携。
- ③ 動物園・植物園で共同した教育旅行（修学旅行等）やインバウンドの誘致。



（事例：植物園由来の木材を活用した環境エンリッチメント）



施策 12 国内外の実習生の受入れによる教育の場の形成

国際的協力の実践として、シドニー大学やエジンバラ大学などからの獣医学実習生の受入れをはじめ、国内各地の大学から学芸員実習等の多様な実習生を積極的に受け入れ、国内外の教育の場としての動物園を目指す。

具体的なアクション

- ①シドニー大学やエジンバラ大学等の海外からの獣医学実習生への教育の提供。
- ②京都大学との連携に基づく海外研修生の受入れ。
- ③国内各地の大学から学芸員実習等の多様な実習生の積極的な受入れ、教育の提供。



(事例：京都大学の海外研修生をガイド)

現在の取組

実習生及び体験実習の受入れ

- ・大学生を対象とした様々な実習生の受入れのほか、学校又は教育委員会からの依頼を受けて中学生の体験学習（生き方探求・チャレンジ体験）及び高校生の職場体験プログラム等を行っている。

施策 13 京都市立芸術大学との連携等、文化を発信する場としての機能向上

京都市立芸術大学をはじめとする芸術系大学、その他の文化芸術団体等とも連携を図り、文化を発信する場としての動物園の機能を高める。

具体的なアクション

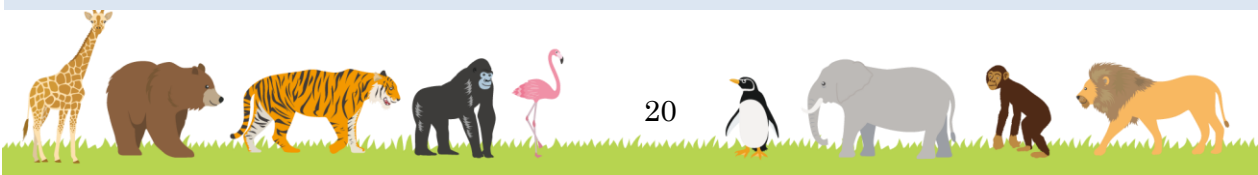
- ①京都市立芸術大学、京都市京セラ美術館との連携（動物画の企画展の実施や製作等）。
- ②芸術家グループや芸術系大学（嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学、京都精華大学、京都造形芸術大学等）との連携。
- ③「KYOTO STEAM—世界文化交流祭—」[※]において、アート・サイエンスのコラボレーションプログラムの実施。
- ④音楽コンサート等のイベントの実施による文化に触れる場の創出。



(事例：芸術団体との共同企画による展示)

注 KYOTO STEAM—世界文化交流祭—

文化庁補助事業「文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業」を活用し、京都・日本を文化・芸術の交流のハブへと進化させていくための取組。「KYOTO CULTIVATES PROJECT」の理念を文化芸術の新たな可能性と価値を世界に問う新しい形態の「国際的な文化・芸術の祭典」。STEAMとは、Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Art（芸術）、Mathematics（数学）の略。



◆ 施策 14 世界に向けた研究成果や動物園の取組の発信

国際環境エンリッチメント会議（ICEE）の京都大学との共同開催や世界博物館会議（ICOM）への参画を契機とし、国際的な学術集会において研究成果の発表や本園の取組等を伝え、世界の舞台で活躍する動物園を目指す。

具体的なアクション

- ①国際霊長類学会、国際応用動物行動学会等、英語を公用語とする動物研究に関する国際会議への参加と発表。
- ②世界動物園水族館協会（WAZA）[※]総会への出席と世界の加盟園館との交流の推進。

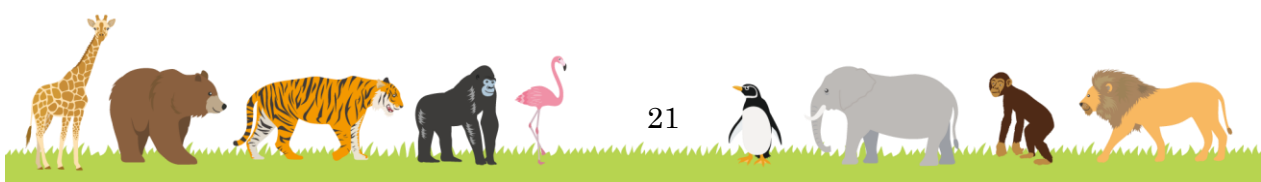
現在の取組

世界動物園水族館協会（WAZA）への加盟園の一員としての活動

- ・平成30年（2018）5月に世界動物園水族館協会（WAZA）へ加盟したことにより、国際的に認められた動物園であることをPRし、希少動物の導入や持続可能な繁殖、教育・研究の取組を更に進める。
- ・国内では、現在、本園のほか、（公社）日本動物園水族館協会（JAZA）、東京都恩賜上野動物園、東京都多摩動物公園、横浜市緑の協会、埼玉県こども動物自然公園、大阪市天王寺動物園、名古屋市東山動物園、ふくしま海洋科学館、千葉市動物公園の9団体が加盟。

注 世界動物園水族館協会（WAZA）

World Association of Zoos and Aquariums の略。昭和10年（1935）に設立した「世界動物園長連盟」を母体として発展し、平成12年（2000）に現在の「世界動物園水族館協会」となった。動物、種、生息環境の保全と持続可能性のために、世界中の動物園と水族館の潜在的可能性を達成する。動物園と水族館の世界的な共同体としての、コミュニケーション・プラットフォームとして機能している。



施策 15 学校教育の素材としての動物園の活用の推進

大学や教育委員会、環境教育団体等と連携し、学校教育の素材としての動物園の活用を推進する。

具体的なアクション

- ①教育プログラムに基づいた学校向け教育素材の提供（動物の生態や環境問題を伝えるコンテンツ等）。
- ②「大学のまち京都」の特性を活かした、地域の自然や環境問題を幅広い世代に伝えていくことができる人材の育成。
- ③新学習指導要領に対応し、主体的かつ対話的に深い学びが得られるようにする。また、生徒だけでなく教師が活用できる事前学習教材の開発に努める。



（事例：京都精華大学の環境教育活動の様子）

現在の取組

①講演の実施

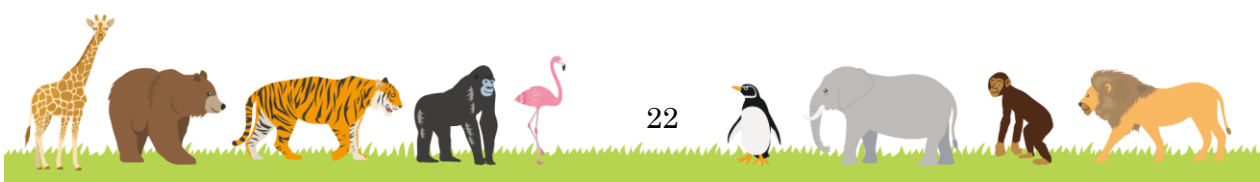
- ・教育機関や各種団体向けに動物園や動物に関する講演を実施しているほか、各種教育資料の提供を行っている。
- ・また、閉園後に正面エントランス1階の図書館カフェを利用して、参加者の皆様と様々な話題をお話するイベント「夜の図書館カフェ DE トーク」も開催している。



（レクチャールームでの講演の様子）



（夜の図書館カフェ DE トークの様子）



②サマースクール等の実施

- ・小学3年生から高校3年生までを対象に、普段は体験できない動物舎の清掃等の動物たちの飼育体験やその生態について学ぶことができるサマースクールを夏休み期間に開催。
- ・高校生以上を対象に、飼育体験（動物舎清掃や餌作り等の体験）や、動物園について学ぶこと（動物園を知るための話、普段は入ることのできない施設の見学等）のできる「一日動物園体験」を開催。



(サマースクールの様子)



(一日動物園体験の様子)

教育プログラムについて

- ・教育機関や市民向けのイベント、講演会、実習等の取組を総称して教育プログラムとし、野生動物の調査・研究で得た成果を教育機関や市民に教育プログラムを通して還元しています（P 26 で提供可能な講演や教材を紹介しています）。



(教育プログラムのチラシ)



③なかよし教室

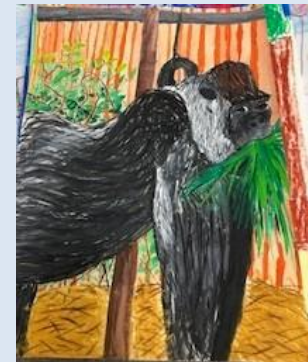
- ・「動物に触れることにより，命の大切さや温かさを感じる」，「動物を間近で観察し，触れることにより，動物についての知識を深める」ことを目的とした，団体向けのプログラム。
- ・おとぎの国エリアで，テンジクネズミやウサギをなでたり，ヤギにエサやりをすることができる。年間約9，000人が利用している。



（なかよし教室の様子）

④絵画コンクールの実施

- ・夏休み期間中の小学生を対象に，園内の動物や風景を題材にした「小学生動物画コンクール」を開催している。授賞式の開催，入賞作品の展示等を行っている。
- 題 材：本園内の動物又は風景
- 応募資格：京都市内に在住又は市内小学校に在学する小学生



（入賞作品の例）

動物愛護の啓発も行っています！

動物愛護週間事業

- ・動物愛護週間を定めた「動物の愛護及び管理に関する法律」の趣旨を踏まえ，動物愛護と適正な飼育及び保護についての関心と理解を深め，動物愛護や保護の気風を高めることにより生命尊重や情操教育の高揚を図ることを目的として，（公社）京都市獣医師会の主催により，本園共催で実施しています。



（（公社）京都市獣医師会イベントの様子）



（動物慰霊祭の様子）



様々な枠組みで実習生を受け入れています

将来の担い手の教育の場を提供

- ・本園では、獣医や学芸員を目指す大学生を実習生として受け入れています。英語での受入れも可能という強みを活かし、海外の大学からの実習生を受け入れているのは、国内でも数少ない取組です。
- ・また、学校又は教育委員会からの依頼で、中高生の職場体験等も受け入れています。

【実習生の受入れ実績】

区分	対象	実習内容
博物館実習 	大学において博物館学講座の単位を取得又は取得予定者で、当該大学から依頼のあった方	・本園の概要と役割等についての概説と施設見学 ・飼育員の行う動物飼育業務についての実習 ・本園で行っている調査研究・展示・資料保存等の各業務に関する講義・実践 ・企画・交流事業についての講義・実践等
獣医実習  	大学において獣医学課程を学ぶ者（4年生以上）で、当該大学から依頼のあった方 オーストラリア・シドニー大学	・野生動物のハンドリング及び検査・診療・解剖技術に関する講義及び実践 ・本園の概要と役割等についての講義 ・本園で行っている調査研究・展示・資料保存などの各業務に関する講義・実践等 ・平成26年度からオーストラリア・シドニー大学獣医学の実習受入れ施設として協力している。 ・受入れ実績：20名（うち1名はイギリス・エジンバラ大学）
飼育実習 	自然科学系の学科を専攻している専門学校生及び大学生	・動物飼育、動物舎の整備・修繕、環境エンリッチメントの実践、調査・研究、広報・啓発活動等
救護実習 	自然科学系の学科を専攻あるいは卒業、当該大学からの依頼あるいは卒業を証明できる方	・野生鳥獣救護センターにおける業務

【中高生の受入れ実績】

区分	実習内容
中学生体験学習	・飼育体験や園内作業等 ・調査・研究活動
高校生職場体験	・飼育員や獣医師等、動物と関わる仕事を目指している高校生の職場体験

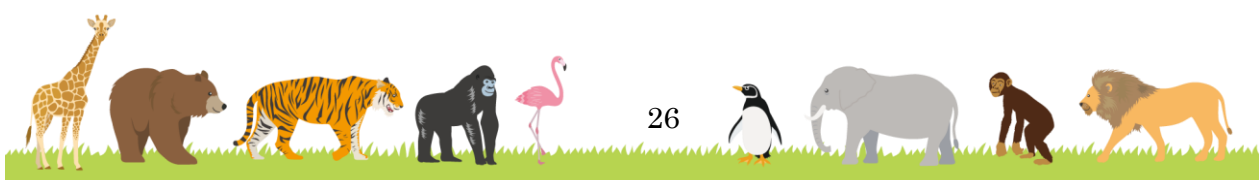


学校や市民の皆様に御提供できます！

- ・本園では、教育機関や各種団体向けに動物園や動物に関する講演を実施しており、近年では年間200件近くの実績があり、教育機関としての役割も果たしています。
- ・閉園時間後に、正面エントランス1階の図書館カフェに各方面の専門家を招き、参加者の皆様と気軽な雰囲気の中でお話するイベント「夜の図書館カフェDEトーク」も開催しています。最先端の科学から、ベテラン職員による昔の動物園の思い出、動物にまつわる芸術作品等、多彩なテーマを取り上げています。

【教育プログラムの中で提供可能な講演や教材】

手法	テーマ	タイトル
講演	動物の保全	動物たちの現状
	動物園の取組	動物園の仕事
		動物園で学ぶSDGs
		動物園の役割
		動物園の見どころ
		動物園研究
		ツシマヤマネコの保護増殖事業
	動物の生態	動物の暮らし
		日本の自然と動物
	動物の体と暮らし	動物の赤ちゃん
		動物のうんち
		動物の骨格
	命のつながり	ゾウの肥料
		動物園と疏水の関係
園内ガイド	動物園の取組	動物園の見どころ
		動物園研究
	命のつながり	ゾウの肥料
		動物園と疏水の関係
講義実習	動物の体と暮らし	骨格標本を組み立ててみよう
資料提供	—	小学校2年生国語「どうぶつ園のじゅうい」京都市動物園編
		生活科学習支援「どうぶつのうんち」
		英語学習支援
		クイズ 等



【夜の図書館カフェ DE トークの開催（令和元年度（2019）実績）】

テーマ	ゲスト
ヤクスギの森に住むニホンザルの暮らし	京都大学霊長類研究所准教授 半谷吾郎
海外のゴリラ飼育に触れて&キンタロウの誕生	京都市動物園種の保存展示課 安井早紀
ボノボの老化は人間より早いのか？	京都大学霊長類研究所非常勤講師 柳興鎮
アムールトラの域外保全 ～動物福祉と環境エンリッチメント～	京都大学大学院理学研究科修士課程修了 岡桃子
クマノミとイソギンチャクの共生関係を支えるしくみについて	京都大学野生動物研究センター特任研究員， 理学博士 幸島和子
ゴリラのお勉強 ～ゴリラはどれくらいできるのか！？～	京都市動物園生き物・学び・研究センター長 田中正之
動物園をもっとおもしろく	動物園ムードメーカー・zoojo（ズージョ）
心拍と体温から探るナマケモノの省エネ生活	奈良教育大学自然環境教育センター／ 京都大学野生動物研究センター 村松大輔
キリンはどれだけ眠るのか	京都市動物園種の保存展示課係長 高木直子 京都市動物園生き物・学び・研究センター 主席研究員 山梨裕美



構想の柱4

多くの人が集い、多くの学びを広げる動物園

施策 16 岡崎地域活性化のための連携

京都市における文化・観光拠点の一つである岡崎公園に立地している地理的環境を活かし、岡崎地域他施設（京都市京セラ美術館、ロームシアター京都、琵琶湖疏水記念館等）、**京都岡崎魅力づくり推進協議会**、**岡崎連絡会**、京都市の関係部署（総合企画局プロジェクト推進室、産業観光局観光MICE推進室、交通局等）と連携し、岡崎地域の活性化を図るとともに、来園者の増加に繋がる取組を進める。



（事例：岡崎の魅力を伝える動物園ツアー）

具体的なアクション

- ①「京都岡崎コンシェルジュ」などのポータルサイトや「岡崎手帖」等のガイドブックを活用した情報発信力の強化。
- ②法勝寺の造営跡や琵琶湖疏水の活用についての情報発信。
- ③国の「重要文化的景観」に選定された「京都岡崎の文化的景観」を構成する施設として、東山を借景とした花や緑が美しく映える自然環境を活かした、四季を身近に感じることでできる空間づくりの促進。
- ④夜間開園等、岡崎地域他施設と連携したイベントの実施。



（事例：夜間開園）

施策 17 外国人観光客の誘致（多言語化等）

国際文化観光都市として、園内の動物説明板等の多言語化を図り、観光客・インバウンドによる海外からの来園者を積極的に誘致する。特に、アジア圏の訪日観光旅行者が多いことから、アジア圏の言語の翻訳に重点を置く。

具体的なアクション

- ①動物説明板やパンフレット等の多言語化の促進。
- ②インバウンド向けの観光雑誌への情報掲載。



（事例：中国語パンフレット）



施策 18 「環境都市・京都」の発信による教育旅行の誘致

生物多様性や地球環境の保全等の環境教育に力を入れ、「環境都市・京都」のシンボル施設として定着させ、訪日観光旅行者や教育旅行（修学旅行等）の誘致を図る。

具体的なアクション

- ①「環境都市・京都」の取組を発信できるコンテンツの作成。
- ②全国各地の教育機関への本園の取組の周知。



（事例：研修旅行で訪れた高校生）

施策 19 効果的な広報活動の展開

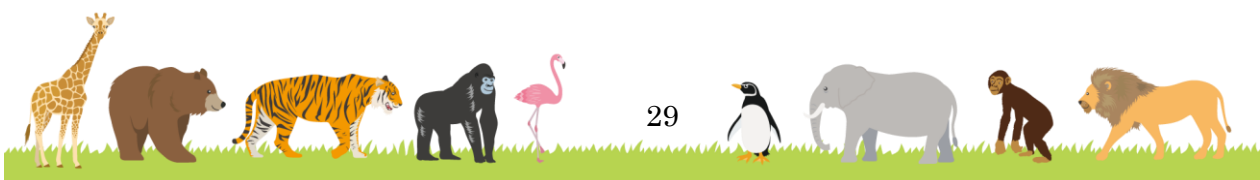
本園に関する様々な情報を、多くの方々に分かりやすく伝えるため、「動物園だより」や「Zoo News」をはじめとする各種刊行物や、テレビ、新聞、SNS、HP等の広報媒体を有効に活用し、効果的な広報活動を展開する。

具体的なアクション

- ①時代に即した広報媒体（刊行物やSNS（Twitter, Instagram, Facebook）等）の積極的な活用。
- ②広報効果の大きい広報媒体（テレビ、新聞）への細やかな情報提供。
- ③PTAフェスティバルや各区ふれあいまつり等、地域のイベントへの出展による積極的な周知活動。



（事例：動物園 twitter ページより）



構想の柱5

「近くて楽しい動物園」の更なる発展

施策 20 展示の充実及び「エコ・Zoo」の推進

時代に即した展示技術の工夫及び動物の生態や解説の充実によって、魅力ある展示を目指す。また、太陽光発電等自然エネルギーを活用し、環境に配慮した「エコ・Zoo」の取組を更に進める。



(事例：エネルギー管理システム)

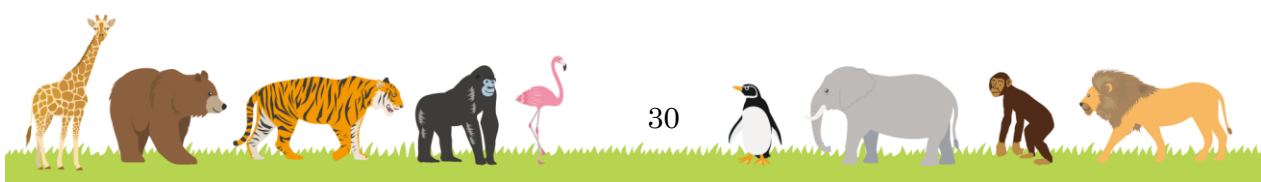
具体的なアクション

- ①時代に即した展示技術の工夫及び動物の生態や解説の充実。
- ②自然エネルギー設備の導入促進。

現在の取組

「エコ・Zoo」の取組

- ・スマートシティ京都プロジェクトの一環として、岡崎地域全体でのエネルギーとエコのショーケース化に取り組んでおり、その1拠点である本園では、「エコ・Zoo」の実現に向けた様々な環境に配慮した取組を行っている。



施策 21 ユニバーサルデザインの推進

障害者，小さな子ども連れの家族，高齢者等の特に配慮が必要な来園者が楽しめるよう，ユニバーサルデザインを推進する。

具体的なアクション

- ①園内の通路・施設・サイン等のユニバーサルデザイン化の促進。
- ②ベンチやパーゴラ（日除け屋根）等休憩施設整備の充実と適正な維持管理の実施。
- ③園内の美化の徹底及びホスピタリティ溢れる空間づくりの実施。



（事例：点字ブロックとスロープ）

施策 22 顧客満足度（CS）の高いサービスの提供

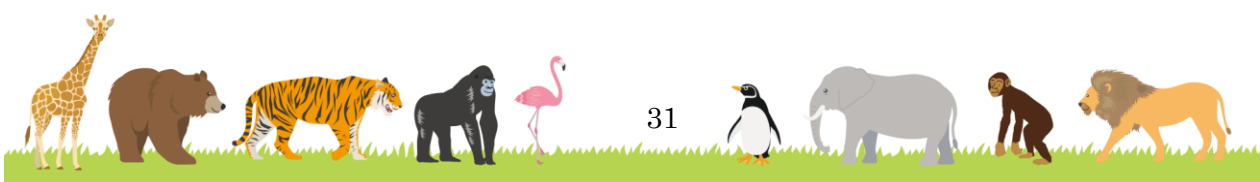
「レストラン」や「ショップ」で，入園者の思い出に残るような「食べる楽しみ」，「買う楽しみ」を大切に，顧客満足度（CS）の高い施設づくりやイベント運営を進める。

具体的なアクション

- ①来園者のニーズを捉えたメニュー，グッズの充実。
- ②本園オリジナルグッズの販売。
- ③大人も楽しめるイベント（プレミアムフライデー in Zoo ナイトツアー with ビア等）の継続。
- ④子ども大人も楽しめる体験型イベントの充実。



（事例：本園オリジナルグッズ）



◆ 施策 23 市民ボランティアとの協働

京都市動物園ボランティアーズをパートナーとして、おとぎの国運営の充実に努めるとともに、本園のガイドを行う「ガイドボランティア」等、市民ボランティアの活動範囲を拡大する。また、学生のまち京都の特長を活かし、京都外国語大学と連携など、多言語ガイドを担う学生のボランティアと積極的に協働し、市民とともに育む動物園を目指す。



（事例：ボランティアーズの活動）

具体的なアクション

- ①京都市動物園ボランティアーズの更なる育成・登録促進。
- ②ガイドボランティアや多言語ガイドを担う学生ボランティアとの協働。

現在の取組

京都市動物園ボランティアーズ

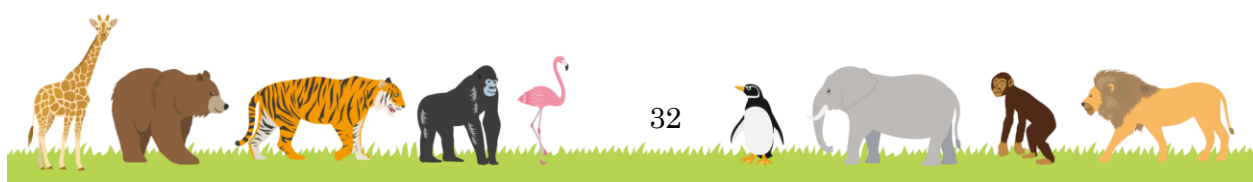
- ・昭和56年（1981）に発足し、「おとぎの国」を中心として現在に至るまで活動を継続している。学生から会社員、主婦と幅広い年代や職業の約50名が、土日を中心に活動している。

○活動目的：

本園の職員と協力して「ふれあい」をサポートすることで、来園者に笑顔で動物と接していただき、感動したり新たな発見をして帰っていただくために活動。

○主な活動内容：

①ふれあいの お手伝い	ウサギ、テンジクネズミの背中をなでるお手伝い	来園者の方に安全にふれあいをしてもらうために、ウサギやテンジクネズミの安全な触れ方のアドバイスやお手伝い。
	おとぎの国の動物ガイド	来園者に楽しんでいただけるように、おとぎの国にいる動物（ヤギ、ヒツジ、ミニブタ等）の説明。
②その他	動物のお話の紙芝居や、動物の頭骨を使った説明（草食、雑食、肉食の違い等）。	



施策 24 共汗に基づく市民及び企業の参加促進

市民や企業から御支援いただくサポーター制度や市民参加型のイベントの充実等，御支援のニーズを的確に捉え，市民及び企業との協働による運営を目指す。

具体的なアクション

- ①市民のエサ代サポーターへの参加促進。
- ②看板広告サポーターやホームページのバナー広告の普及促進，商品提携や提案型サポーターへの参加促進による，民間企業の資金やノウハウの導入促進。
- ③「ゴリラのお庭に木を植えよう！」等のイベントを通した本園の運営に対する市民参加の促進。



(サポーター企業向け報告会の様子)

施策 25 ハード整備の推進

動物福祉の観点から課題のある「サルワールド」（サル島及び類人猿舎）をはじめとした園内動物舎について飼育展示の見直しと施設整備の検討を進める。整備に当たっては，周囲の動物舎との調和や，教育・研究機関としての機能拡充を考慮する。

具体的なアクション

- ①動物福祉に配慮した園内動物舎の整備の検討。
- ②教育・研究機関としてハード面からの機能拡充。



(事例：サル島（昭和12年竣工）)

施策 26 動物舎の計画的な維持・管理充実

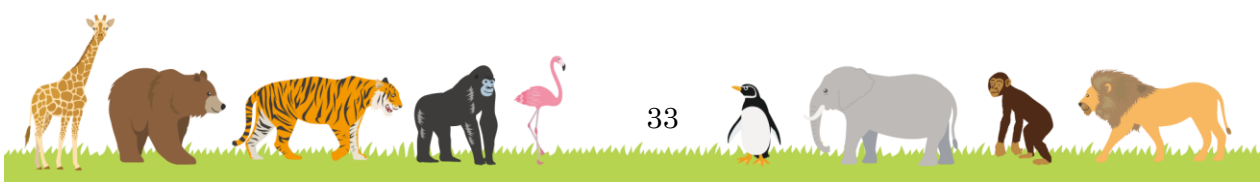
動物舎に対して必要な修繕を計画的に実施し，動物福祉に配慮した改修や施設の長寿命化を図る。また，園内景観の重要な要素である植栽の管理についても，維持・管理充実を図る。

具体的なアクション

- ①動物舎の修繕計画の作成。
- ②園内の草花や樹木の充実整備と育成管理。
- ③毎月1回の定期パトロール等，予防保全型の維持・管理の実施。



(花の植替え作業の様子)



施策 27 運営体制の充実及び更なる安全対策の実施

本構想の各施策を進めるために必要な体制を整備し、効果的で効率的な業務を進められる職場環境づくりに努める。また、各施策を展開するために、集客の取組やイベントの有料化等、増収に努め、必要な財源を確保するとともに、必要な経費についても適宜点検し、経営の視点を取り入れながら、運営体制を充実させる。また、定期的に施設の点検を行い、来園者と職員等の安全確保に努める。

具体的なアクション

- ①本構想を推進するための本園の運営体制の充実・職場環境づくり。
- ②有料イベントの企画検討、実施。
- ③必要経費の点検と経費削減の推進。
- ④安全対策のための動物舎などの施設の定期点検等の実施。



(動物脱出対応訓練の様子)

現在の取組

- ・平成20年(2008)6月に発生した飼育員死亡事故を教訓に、安全管理担当者を設け、職員の安全対策を進めている。また、毎月、安全衛生委員会を開催し、情報共有を行っている。
- ・大型動物の移動の際、必ず係長級以上の職員が付き添うこととしている(ダブルチェックの徹底)。
- ・年2回、動物舎などの施設の定期点検等を実施している。
- ・年1回、動物脱出対応訓練の実施。危険動物の脱出事故という緊急事態を想定し、被害の拡大を防ぎ、来園者及び地域住民の安全を確保することを目的としている。

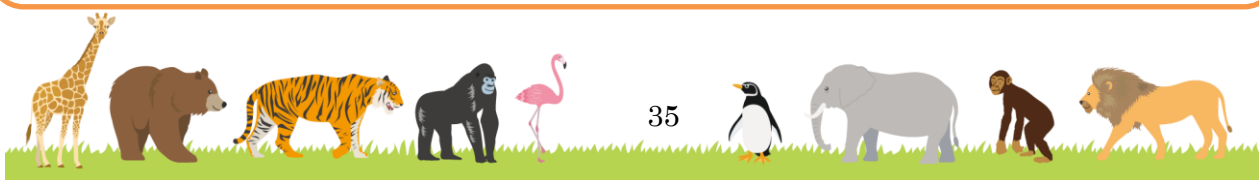


本園では様々なイベントを開催しています！

知的好奇心を満たす学びを提供

・「学び」の中にある「楽しみ」を皆様に提供するため、様々なイベントを開催しています。

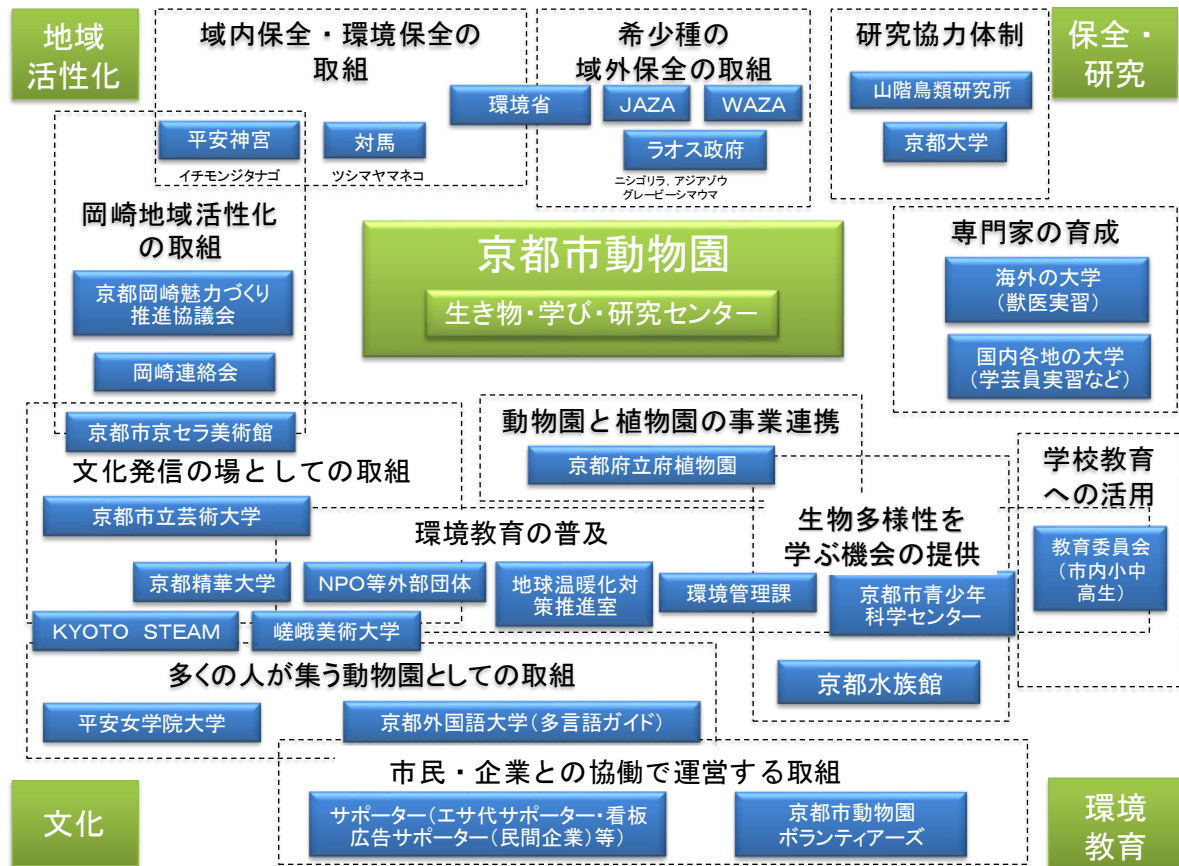
イベント名	内 容	
どうぶつのお宅拝見！ (H19～)	キリン舎やゾウ舎等、普段は入れない動物の寝室をのぞいてみる事ができる。	
飼育員のお話 (H19～)	日々飼育作業を行っている飼育員だからこそ知っている動物たちの裏話等が聞ける。	
獣医が行く！ (H19～)	動物たちの治療を行っている獣医から、動物の話や苦労話等、様々な話が聞ける。	
サルのお勉強の話 (H20～)	生き物・学び・研究センター職員から、チンパンジー、シロテテナガザル、マンドリル、ニシゴリラを対象とした、タッチモニターを使った数字の系列を学習する「お勉強の時間」の取組等の話が聞ける。	
ゾウ温泉 (H28～)	「ひかり・みず・みどりの熱帯動物館」のボイラーで沸かしたお湯をゾウのプールに給湯し、ゾウがお湯につかって楽しむ様子を見ることができる。	
園長さんとお散歩 (H29～)	園長が動物や動物園の取組等を解説しながら楽しく案内する、大人が楽しめる動物園ツアー。	
6000万年サルの旅 (H30～)	霊長類の進化や生態，認知能力についての研究成果が聞ける。	
プレミアムフライデー in Zoo ナイトツアー with ビア (H30～)	野生動物や動物園の魅力を伝える講演，ガイドツアー，本園職員と交流を図りながら夕食を楽しむことができる。	



様々な施設・機関とネットワークを築いています！

本園を取り巻くネットワークのイメージ図

・様々な施設・機関とともに、動物園文化を発信します。

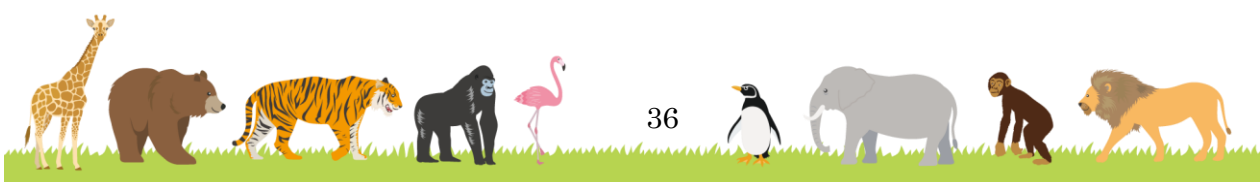


※施設名・機関名等については一部省略しています。

※略称について

J A Z A (Japanese Association of Zoos and Aquariums) (公社)日本動物園水族館協会

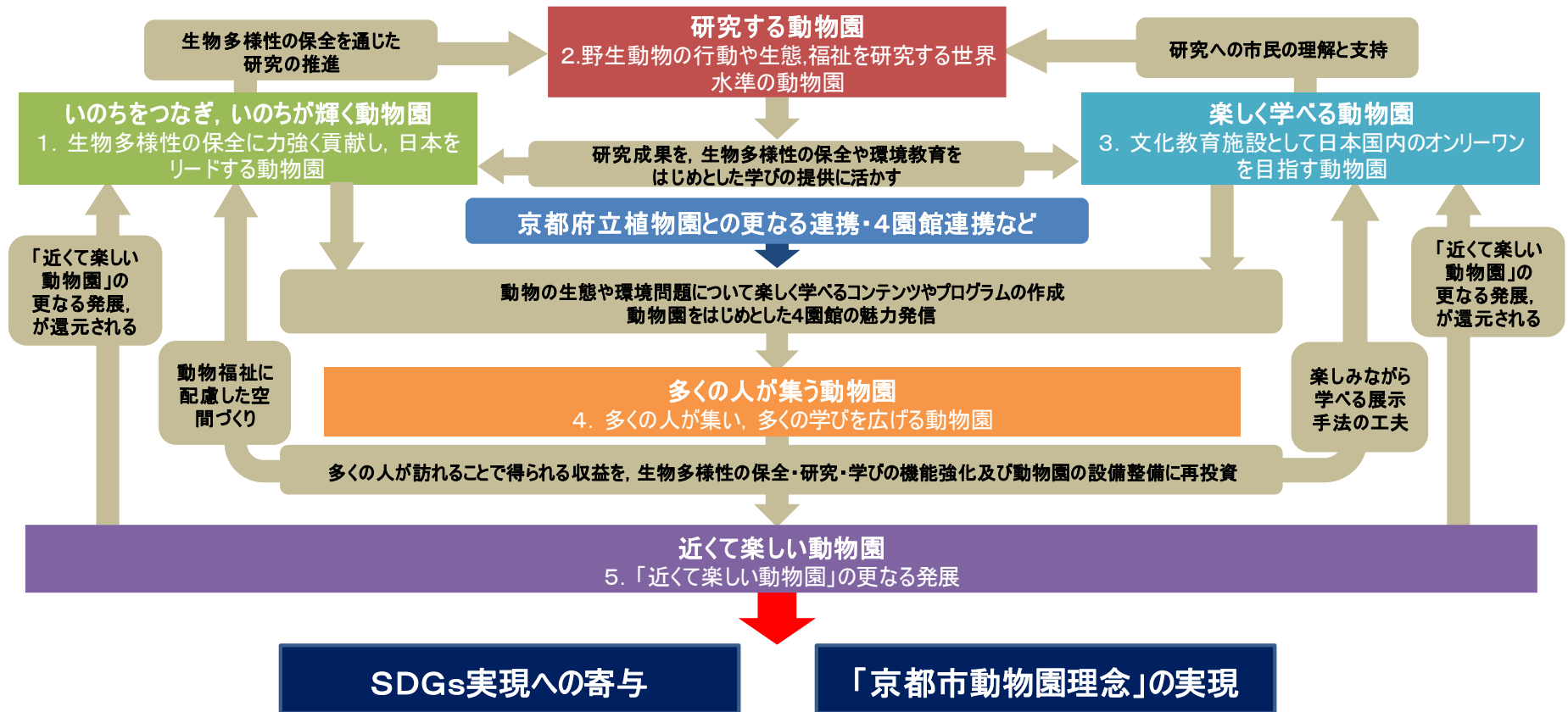
W A Z A (World Association of Zoos and Aquariums) 世界動物園水族館協会



(4) 5つの柱と27の施策の戦略的な推進

本園の役割や施策ごとに求められる、「機能」や「事業」が個々に取り組みられるだけでなく、それぞれの関係性を考慮し、相乗効果を生み出せるような取組とすることが重要です。

そのような役割や施策の関係性に基づき、必要な「機能」や取り組むべき「事業」を検討することによって、SDGs実現への寄与を目指すとともに、「京都市動物園理念」の実現に向け、戦略的に施策を展開します。



図：新たな「京都市動物園構想」5つの柱と27の施策の戦略的な推進



4

京都市動物園コレクションプラン



コレクションプランとは、動物の保存、繁殖に取り組むために動物を選定、分類し、管理していく計画のことです。

京都市動物園のコレクションプランは、（公社）日本動物園水族館協会（JAZA）のコレクションプラン（JAZA collection plan, JCP）を基に検討し立案しました。本園のこれまでの取組や実績、飼育状況に加え、動物福祉の観点、種の保存への貢献度、教育的価値、学術的価値、展示効果を指標にして選定し、最優先種、優先種、維持種、調整種の4つのカテゴリーに分けて管理していきます。展示する動物種及び個体数を適正に管理するための見直しは定期的に行っていきます。

最優先種

5種（全飼育種の約4%）

種の保存に貢献でき、特に繁殖を優先する種。



アジアゾウ
EN(IUCN)



ニシゴリラ
CR(IUCN)



グレビーシマウマ
EN(IUCN)



ツシマヤマネコ
CR(環境省)



イチモンジタナゴ
CR(環境省)

優先種

20種（全飼育種の約17%）

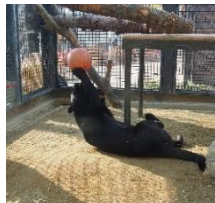
ハズバンダリートレーニング（健康管理のために行う受診動作訓練）計画や動物福祉チェックを通して、持続的な飼育展示を維持するための取組や動物福祉に配慮した取組を評価・検証し、より良い飼育管理及び飼育環境作りに取り組む種。



チンパンジー
EN(IUCN)



マンドリル
VU(IUCN)



ジャガー
NT(IUCN)



ヤブイヌ
NT(IUCN)



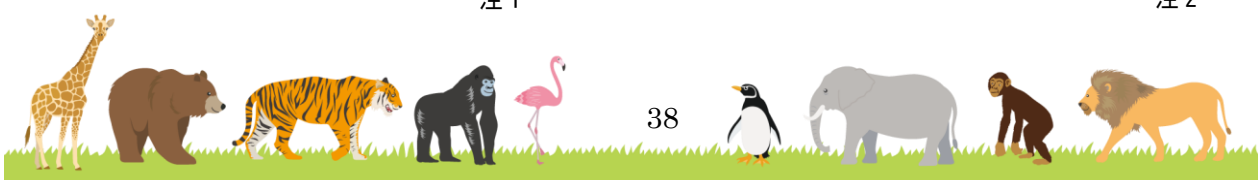
フンボルトペンギン
VU(IUCN)

絶滅の危険性（IUCN レッドリスト）
低 LC NT VU EN CR 高

絶滅の危険性（環境省レッドリスト）
低 NT VU EN CR 高

注1

注2



【コレクションプランにおける飼育動物の分類】

(令和元年(2019)9月末現在)

	哺乳類	鳥類	両性・爬虫類	魚類	計
最優先種	4			1	5
優先種	11	4	5		20
維持種	23	36	31	1	91
調整種	3	2			5

維持種 91種(全飼育種の約75%)

飼育展示を維持する種。

ショウガラゴ, ニホンツキノワグマ, ブラジルバク, ムササビ, シロフクロウ, エミュー, アオバト等

調整種 5種(全飼育種の約4%)

個体群の維持管理が困難なことや動物福祉の面から改善が困難で飼育展示の見直しが必要な種。



・ライオン

本来は群れで暮らすライオンを飼育するための十分な広さが確保できないことから、動物福祉に配慮し、現個体を最後に飼育展示を中止します。



・オナガゴースル

国内で唯一の個体であり、飼育展示の安定的な持続性が保たれないことから、現個体を最後に飼育展示を中止します。



・アカゲザル

飼育園が少なく、多様性を維持するためのオス個体の入替えができず個体群の維持が困難なことから、現個体群を最後に飼育展示を中止します。



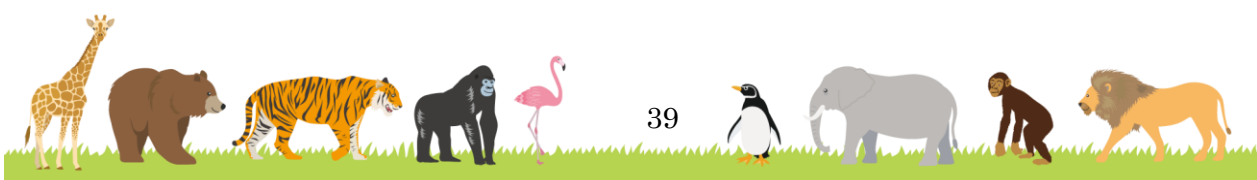
・シロエリオオヅル

タンチョウ舎の一部を仕切り飼育を継続していますが、将来にわたり十分な広さを確保できないことから、引き続き移動先を探します。



・ヒヨドリ

野生鳥獣救護事業の救護対象から外れ導入が困難なため、現個体を最後に飼育展示を中止します。



サルワールドの方針

「サルワールド」は、原始的なサルからヒト科に属する大型類人猿に至るまで多様な霊長類を展示しており、ヒト科との形態的な違いや知的能力の度合い等も含めた比較展示を行っている。「霊長類学の祖」である京都大学と連携している本園にとって、本エリアは連携の顔ともいえるエリアであり、優先種であるニシゴリラの繁殖に取り組むとともに、チンパンジーやマンドリルについて優先種に準じた取組及び施設整備の検討を進める。

個体群管理の方針

- ・レッサースローロリス飼育施設の整備及び繁殖可能な個体導入
- ・ワオキツネザル、フサオマキザル、ショウガラゴの飼育展示継続に向けた取組
- ・アカゲザルの現個体群の終生飼養
- ・シロテテナガザルの現有個体の終生飼養

もうじゅうワールドの方針



「もうじゅうワールド」は、正面エントランスから入園する多くの来園者が観覧する最初のエリアである。

このエリアに対する来園者の反応は大きく2つに分かれる。より間近に動物たちを感じられることに対する肯定的な反応と飼育環境の狭さに対する否定的な反応である。近年、「動物福祉」への配慮が大きな潮流となっており、国際的な

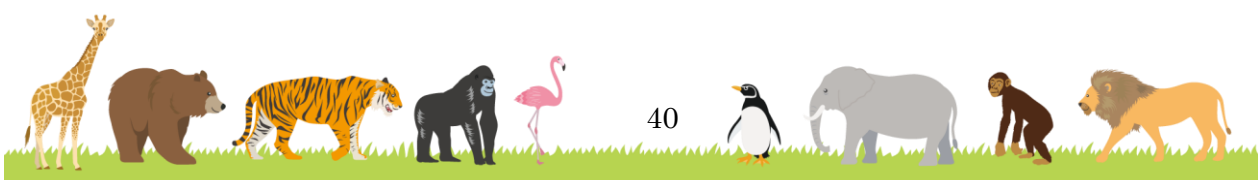
取組を進めていく上では課題である。

こうした状況から、本来は群れで暮らすライオンを、広さに課題がある「もうじゅうワールド」で飼育を継続することは難しく、現個体を最後に展示を中止する。なお、日本初の人工哺育に成功した実績については、将来へ受け継いでいく。

「もうじゅうワールド」では、小型から中型のネコ科の飼育展示に変更していく方針とする。

個体群管理の方針

- ・ツシマヤマネコの展示個体の維持
- ・ライオンの飼育展示中止
- ・アムールトラの飼育展示のあり方の検討
- ・ジャガーの繁殖に向けた取組
- ・ヨーロッパオオヤマネコ（メス）の導入



注1 国際自然保護連盟（IUCN：International Union for Conservation of Nature and Natural Resources）レッドリスト

Critically Endangered (CR)	深刻な危機
Endangered (EN)	危機
Vulnerable (VU)	危急
Near Threatened (NT)	準絶滅危惧
Least Concern (LC)	低懸念

注2 環境省レッドリスト（括弧内は IUCN における分類を示す）

絶滅危惧ⅠA類 (CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種
絶滅危惧ⅠB類 (EN)	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅の危険が増大している種
準絶滅危惧 (NT)	現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種



